

ウィリアム・ブレイク《アダムを創造するエロヒム》における暗い太陽 — 「偽りの太陽」の絵画表現—

中嶋 康太 (慶應義塾大学)

イギリスの初期ロマン主義における画家、詩人、版画家であったウィリアム・ブレイク(1757-1827)がキャリアの中盤に制作した大色刷版画の一枚が《アダムを創造するエロヒム》である。12種類の版画作品から構成される大色刷版画には、彼の絵画作品の代表作である《ニュートン》や《ネブカドネザル》も含まれており、ブレイクの絵画・版画作品の中でも重要とされている作品群である。《アダムを創造するエロヒム》には、陰鬱な風景の中に有翼で白髪的人物として描かれたエロヒムが若い裸体の男性としてのアダムに覆いかぶさっている創造の場面が描写されている。同作品は、画中に描かれた二人の人物の表情や、彼の詩などによって示されてきたグノーシス的世界観との関連から、ブレイクが生涯を通じて抱いていた信条である「物質世界の創造の否定」を示す作品として解釈されてきた。

本発表では、背景に描写された半円状の暗い太陽とそこから発せられる光線に着目し、この表現がブレイクの過去の絵画作品から継承された世界観の表現であったことを指摘する。こうした太陽は、一部の研究では単なる風景描写の一形態であり、否定的な場面の性質を強調するための描写にすぎないとして注目されてこなかった。しかしながら、ブレイクの絵画作品の太陽表現に目を向けてみると、こうした暗い太陽は単なる絵画表現としてではなく、意図して描写され、彼の世界観を示す象徴として機能している可能性が高いと考えられるのである。そうした議論の論拠となるのが、彼が同時期に制作した挿絵入り詩集の一部となる、『ヨーロッパ』の口絵《日の老いたるもの》と『ロスの歌』における口絵とプレート 8 の作品である。これらの作品は、詩中に関連する描写が存在しないために、解釈が分かれてきたが、いずれの作品にも独特の太陽表現が存在しており、いずれも単純な天体として太陽を表現しておらず、その光線表現は太陽の裏側に別の光源の存在を示唆するものである。

以上の表現とブレイク独自の思想を照らし合わせることによって、本発表では、ブレイクが現実世界の太陽をある種の「偽りの太陽」と考えており、「真なる太陽」がそれとは別に存在していたという思想を一連の太陽表現によって表現したことを明らかにする。さらに、ブレイクの聖書主題水彩画作品の一枚である《ヤコブの梯子》における独特な螺旋状の梯子と太陽の表現についても分析することで、こうした太陽表現が一時的なものではなく、その後の少なくとも 10 年以上継続的に利用されてきたことを明らかにしていく。

以上の議論によって、日本では主として詩人として語られがちなブレイクの画家としての側面をこれまでになく形で提示していく。さらに、ブレイクの思想表現は詩を土台とし、その付随的表現として視覚芸術が存在していたのではなく、それぞれが独立して存在していたことを明確にする。